

取組実績の概要 【2ページ以内】

【総論】

大学院レベルでの日中韓交流の中で、東アジアにおける公共政策・国際関係分野での英語による最高水準の学位プログラムをつくり出すという目的に近づくため、ソウル大学校・北京大学との間で単位互換を伴う交換留学、およびダブル・ディグリーの学位プログラムを実施した。

・3方向のダブル・ディグリーと交換留学を実施することにより、日中韓の共同教育プログラムの充実に貢献した。

・三大学の共同実施科目とすべく、「CAMPUS Asia Joint Course」を開講し、三大学の教員が共同で講義を受け持った。

・沖縄や広島、長崎などを訪問することで日本の歴史・文化に関する理解を深める交流を行った。

・3校合同のCAMPUS Asia Alumni Associationと連携し、修了生ネットワークの深化を図った。

<コロナ禍における対応> 令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、本学では、国内で最も早い2020年4月第1週から授業や会議をオンラインで実施し、講義はすべてライブで実施するなどオンラインの特性を有効に活用することが出来た。実渡航の制限もあり実際に学生が集まったりフィールドトリップに行ったりする機会がほとんど失われたものの、ソウル大学校の2名の学生は渡航が可能なタイミングで本学が積極的にサポートすることで入国が可能となり、また、東京大学の学生をソウル大学校へ派遣した。講義そのものはオンラインで行い、物理的な移動も伴い交流を促したという意味で、コロナ禍の早い段階からハイブリッド型の交流を実施した。また、物理的な移動を行うトリップは実施できなかったため、オンラインによる「日中韓ミニフィルムフェスティバル」をハイブリッド形式で行うことで、トリップに代わる文化体験を実施した。

【派遣受入】ダブル・ディグリー、交換留学のプログラム参加者選考、派遣受入を実施した。本事業はパイロットプログラムから継続してダブル・ディグリー、交換留学の派遣受入を実施しており、2016年4月～2020年3月の実績は派遣49人、受入57人であった。なお、2016年交付決定後2020年度末までの実績は派遣46人、受入45人であった。ダブル・ディグリートラックでは、1年のダブル・ディグリーと半年の交換留学を行い、交換留学トラックでは、半年の交換留学を2か国で行った。原則としてすべての参加学生が日中韓で学んだ。

【Joint Academic Board Meeting (JABM)】2016年～2020年度に、3大学でプログラムの運営方法や課題等について協議するJoint Academic Board Meeting (以下JABM) を、以下の通り交付決定前に1回、交付決定後に7回開催した。

第6回	2016年7月	東京大学にて (交付決定前)
第7回	2017年1月	東京大学にて
第8回	2017年5月	ソウル大学校にて
第9回	2018年1月	北京大学にて
第10回	2018年7月	東京大学にて
第11回	2019年1月	ソウル大学校にて
第12回	2019年9月	北京大学にて
第13回	2020年7月	オンライン開催 (東京大学主催)

JABMにおいて、本事業期間の参加学生への財政支援等に関する覚書を締結し、3校間での単位互換、マッチング、北京大学での学籍発生の時期、アカデミックカレンダーの違いによる成績確定の時期等、ダブル・ディグリーの実施に関する問題について議論し、Campus Asia Joint Courseについての検討や修了生ネットワークの支援に関する協議を行った。2020年度はコロナ禍のため、初めてのオンライン開催となった。

【Campus Asia Joint Course】東京大学において、Campus Asia Joint Course: International Public Policy in East Asiaを開講した。JABMにおいてシラバスを共有し、3か国でどのように協働するかについて協議した。すべての学生が物理的に一堂に会する形態の授業の実施は予算の関係上不可能なので、まずは東京大学に在学する3か国の学生を対象に授業を行い、ソウル大学校及び北京大学の教員を約2回ずつ招聘して本学の教員と共同で授業を行うという形式をとることにした。本学でも、法学政治学研究科、経済学研究科、東洋文化研究所などの教員の協力を得て担当教員と共同で授業を行った。また、北京大学に在学中に

キャンパス・アジアで本大学院に留学経験のある法学政治学研究科の博士課程の学生がTAとして学生のディスカッションや模擬6か国協議などを行った。

Campus Asia Joint Courseは、毎年春学期に開校し、講義の最後にフィールドトリップを実施した。これまで沖縄や広島、長崎などを訪問することにより、日本の歴史や文化について学び、安全保障や産業などについてセミナーを行った。フィールドトリップには、北京大学、ソウル大学校の教員も参加し、沖縄在住の修了生に通訳兼ガイドとして協力してもらうなど、3か国の教員の連携強化を図るとともに、修了生の人材資源を有効に使うことが出来た。2020年度はコロナ禍によりフィールドトリップの実施を断念せざるを得なかったため、代わりにハイブリッド形式による「日中韓ミニフィルムフェスティバル」を行った。大学から日本、韓国、中国の学生とつないで各国の映画を1本ずつ上映し、それぞれの社会的背景などについてディスカッションを行った。

【BESETO Intellectual Dialogue】3大学院長によるBESETO Intellectual Dialogueを開催した。Joint Academic Board Meetingの開催に合わせ、3校の院長が登壇してパネルディスカッションを行うBESETO Intellectual Dialogueを2017年から計4回開催した。2018年、2019年はJABMの開催地で会場に学生を集め、他の2校とビデオで中継した。2020年度はオンラインのウェビナー形式で一般公開して行った。

【GraSPP Policy Challenge】秋学期におけるチームワークビルディングの一環として、日中韓の混成チームを作って本大学院の事例研究「GraSPP Policy Challenge」の授業に学生を参加させ、グループワークによって政策提言のコンペを行った。特に、コロナ禍においては、実際に対面で会う機会がほとんどない学生同士の間関係構築に役立てることが出来た。

【修了生ネットワーク】JABMに修了生の代表を招待して進捗を確認するなどして、3か国における修了生組織のネットワーク化を支援した。この結果、それまで国ごとで活動していた修了生組織を一つにまとめ、その下に各国の支部と支部の代表を置くことで、連携がとりやすくなった。また、三国協力事務所との連携により、2018年、2019年にはソウルにて修了生ワークショップを開催した。修了生のネットワークはコロナ禍においても活発に行われ、各国の代表者が中心となって組織化が進み、恒例の東京での修了生・在学生のパーティに代えて3か国共同でワークショップを開催した他、本事業のプロモーションビデオや教材ビデオを制作するなど、修了生と大学との連携も強化され、周知活動にもつなげることができた。

【周知活動】本事業を紹介する説明会を開催することにより本事業の周知活動を行った。ホームページを更新して本事業の活動レポートや学生の声を掲載した。修了生が中心となって大学と協力し、本事業のプロモーションビデオを制作した。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

(単位：人)

	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		合計			
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入		
計画※	10	4	14	11	13	14	14	12	12	14	63	55		
実績	実際に渡航した学生 (以下「実渡航」)		4	0	12	11	10	13	12	13	0	0	38	37
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講した学生 (以下「オンライン」)								1	0	4	6	5	6
	実渡航とオンライン受講を行った学生 (以下「ハイブリッド」)								0	0	3	2	3	2

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス） 【1ページ以内】

【質保証を伴ったダブル・ディグリープログラム】日中韓の3大学による交換留学とダブル・ディグリーで構成される共同教育プログラムを開発した。東京大学・北京大学・ソウル大学校はそれぞれ日中韓におけるトップスクールであり、キャンパス・アジアプログラムでは公共政策・国際関係分野において各トップスクールが有する高い質の講義の受講を可能としている。また、東アジアの交流を深めるという意味で、共通科目の開発（Campus Asia Joint Course、詳細は後述）を行い、東アジアをテーマとした講義を実施するとともに、フィールドトリップを実施することで文化体験を行った。キャンパス・アジアプログラムは短期的に3か国を移動するという意味で、学生の移動の負担が大きいプログラムであるが、各校の修了要件・カリキュラムを比較し、単位換算や認定の方法などの観点で、短期的な学生の移動をサポートする仕組みを有している。さらに、問題となりそうな点についてはJoint Academic Board Meetingや担当者同士のミーティングで解決策を協議した。コロナ禍においてもプログラムを止めることなく、オンライン授業を提供することで学習計画へのダメージを最小にとどめる努力を行った。

【Campus Asia Joint Courseでの3校による共同授業のモデルづくり】前述のとおり、東アジアの理解を深化するため、キャンパス・アジアプログラムとしての共通のコア科目（Campus Asia Joint Course）を東京大学・ソウル大学校・北京大学共同で開発した。シラバスを事前に3校で共有し、まず2017年にPilot Joint Courseとして3大学に先駆けて試行した。東京大学がホストとなって北京大学、ソウル大学校の教員を約2回ずつ招聘し、本学教員との共同授業を行った。また、学期の終わりにはフィールドトリップを行い、北京大学、ソウル大学校の教員も参加してもらった。これを一つのモデルとして3校で展開することとし、本学では2018年にCampus Asia Joint Courseとして本格的に開講した。ソウル大学校ではCAMPUS Asia Summer Schoolとして開講し、北京大学ではCampus Asia Joint Courseとしての開講に向けて検討中である。

【プログラム外の学生や修了生への波及】秋学期のリトリートにプログラム外の学生や一部修了生の参加を認め、学生間、修了生 - 在學生間の交流を深めることが出来た。また、2020年度からはプログラム以外の学生も希望者は上限の範囲内でCampus Asia Joint Courseの受講を認め、学生の多様性を得ることが出来た。フィールドトリップの引率スタッフとして修了生の人材を活用することで、教育の質向上や修了生と在校生のネットワークづくりに役立てることも可能になった。修了生の活動を支援することにより、ネットワークが強化されるとともに、修了生として社会貢献に寄与することが出来た。

【修了生ネットワークへの積極的支援】Joint Academic Board Meetingに修了生の代表を招待して進捗を確認するなどして、3か国における修了生組織のネットワーク化を3大学で支援した。この結果、それまで国ごとに活動していた修了生組織を一つにまとめてAlumni Association of CAMPUS Asia BESETOを組織し、その下に各国の支部と支部の代表を置くことで、連携がとりやすくなった。本学では東京支部の活動を支援した。また、三国協力事務所との連携により、2018年、2019年にはソウルにて修了生ワークショップを開催した。2019年には、全体会の後に国ごとに分かれて修了生による在校生のための進路相談会を行った。修了生のネットワーキングはコロナ禍においても活発に行われ、各国の代表者が中心となって組織化が進み、恒例の東京での修了生・在學生のパーティに代えて3か国共同でワークショップを開催した他、本事業のプロモーションビデオや教材ビデオを制作するなど、修了生と大学との連携も強化され、周知活動にもつなげることができた。なお、修了生ネットワークと連携したビデオ制作は、本事業の概要説明の短編ビデオと、東アジアの国際関係や本事業参加者の体験談などを紹介する教材として、3本のビデオを制作し、その過程で早稲田大学の修了生ネットワークの協力も得た。これらのビデオは、青山学院大学、法政大学、慶應義塾大学などで教材として使用されることとなった。

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/campusasia/>